

37. 野生動物研究センター

- I 野生動物研究センターの研究目的と特徴・37-2
- II 「研究の水準」の分析・判定　・・・・・・・・37-3
 - 分析項目 I 研究活動の状況　・・・・・・・・37-3
 - 分析項目 II 研究成果の状況　・・・・・・・・37-5
- III 「質の向上度」の分析　・・・・・・・・37-7

I 野生動物研究センターの研究目的と特徴

野生動物に関する研究をおこない、京都大学の基本理念である「地球社会の調和ある共存に貢献する」ことを目的とする。また、ヒトを含む幅広い動物の基礎的な研究を通じて、人間の本性についての理解を深めることを目的とする。具体的な課題は次の3点である。

- 1 絶滅の危惧される野生動物や、貴重な生態系において重要な位置を占める野生動物を対象とした基礎研究を推進する。これを通じて、野生動物やその生息地の保全をはかる。
- 2 飼育下における動物を対象とした基礎研究を推進する。多くの野生動物、特に絶滅の危惧される動物は、野外での研究は困難なことが多く、飼育下での基礎研究は貴重な情報源となる。飼育下での基礎研究をつうじて、野生下の動物の保全と、飼育下の動物の健康な飼育と繁殖をはかる。
- 3 フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を展開し、これらを統合した新たな学問領域の創生を目指す。このような幅広い、学問領域での総合的研究を通じて、人間とそれ以外の生命の共生をはかる。

[想定する関係者とその期待]

野生動物の基礎研究や保全研究に関わる学問領域としては、生態学、保全生物学、ゲノム科学、哺乳類学、霊長類学、野生動物医学などを想定している。これらの関係者からは、国内で唯一の野生動物保全研究の拠点センターとして、関連分野の研究を推進し、共同研究などの連携した研究活動を期待されている。

飼育動物の基礎研究に関わる学問領域としては、獣医学、動物行動学、認知科学などを想定している。また、動物の飼育に関わる機関として、動物園・水族館を想定している。動物園・水族館の役割の一つとして、研究が重視されるようになってきており、動物園・水族館での研究を推進することが期待されている。大学などの研究機関に所属する研究者による、動物園・水族館での研究を支援するだけでなく、最近、活発になってきている、動物園・水族館に所属する研究員や飼育担当者による研究を奨励・推進することも期待されている。

フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合した学問領域としては、人類学、地域研究などを想定している。野生動物の保全においては、生息地に住む人間活動、人と動物との関わり、文化的な背景などの理解が欠かせない。野生動物を軸とした、総合的な研究の推進や、関連領域をつなぐ橋渡しの役割が期待されている。

希少動物の多くは、海外に生息する。野生動物の生息する、海外の研究機関からは、共同調査、研究者交流、研究者の育成が期待されている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

・研究業績・研究発表

論文・著書等の研究業績や学会での研究発表は、年間におよそ、学術誌に 50 報、一般向けの書籍として 4 冊程度である。また、学会・シンポジウムの発表は、国際学会 60 件、国内学会 100 件程度である（資料 1）。

資料 1. 学術論文数の推移(平成 22-27 年度)

	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
学術誌	25	34	55	60	42	93
一般向け書籍	3	6	3	4	4	9
国内学会等発表	48	39	136	155	114	125
国際学会等発表	46	83	50	65	83	91

・競争的資金による研究実施状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況

科学研究費補助金を 68 件、大型の研究資金 4 件（資料 2、(1)-(4)）、その他 8 件による研究活動を活発に行っている（件数は H22-H26 年度の合計）。科学研究費補助金などにより、個々の研究者の自発的な発想に基づく研究を推進している。大型の研究資金については、いずれも国際的な研究・資金であり海外での調査を研究機関との共同研究として実施している。また、共同利用・共同研究拠点として年間 95 件を受け入れている（平成 26 年度実績）。

・競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附講座受入状況

大型の競争的資金等の受入状況は資料 2 の通りであり、取得状況は良いと言える。寄附講座(資料 2、(5))により、熊本サンクチュアリを中心に飼育下の動物の健康な飼育や、大型類人猿の認知研究等を推進している。また、博士課程教育リーディングプログラム「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」(資料 2、(6))の運営を霊長類研究所と共に担っており、野生動物保全や、動物園・水族館などで活躍できる人材の育成を推進している。

資料 2. 大型の競争的資金等

	タイトル	資金の種類	期間 (年度)	予算総額
(1)	大型動物研究を軸とする熱帯生物多様性保全研究	日本学術振興会・研究拠点形成事業	H24-28	69,960 千円 (開始～H27 年度)
(2)	西部タンザニアにおける野生動物保全研究	日本学術振興会・研究拠点形成事業	H25-27	24,530 千円 (開始～H27 年度)
(3)	動植物資源の保全と持続的活用に関する研究交流	日本学術振興会・アジアフリカ拠点形成プログラム	H22-24	16,500 千円 (開始～H24 年度)
(4)	“フィールドミュージアム”構想によるアマゾンの生物多様性保全	SATREPS	H26-29	62,327 千円 (開始～H27 年度)
(5)	福祉長寿研究部門	寄附講座	H24-28	150,000 千円 (開始～H28 年度)
(6)	霊長類学・ワイルドライフサイエ	文科省・博士課程教育リー	H25-30	530,250 千円

ンス・リーディング大学院	ディングプログラム	(開始～H27 年度)
--------------	-----------	-------------

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

専任教員が 6 名の小部局であることを勘案すれば、研究業績、外部資金の取得など、規模に照らして、十分な数がある。また、その内容として、絶滅の危惧される種を含む、野生動物の基礎研究を、国内外の野生下、飼育下で実施している。野外および飼育下での大型類人猿の研究も推進し、人類の進化、知性、社会性などに関する知見を明らかにしている。これは学術的に価値があるとともに、一般的な関心も高いものである。以上により、野生動物の基礎研究や保全研究、飼育動物の基礎研究、人間の進化の解明にもつながる多様な研究などを推進しており、関係者の期待に応えていると判断できる。

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

全般的に、目的に沿った共同利用・共同研究が活発に行われている。具体的には、以下の活動が挙げられる。

・実施状況

平成 23 年に新規に認定されて以来、順調に共同利用・共同研究の件数が増加しており、平成 26 年度は 95 件を実施した。内容としては、国内外の野生動物、飼育動物を対象とした基礎研究、動物園での基礎研究、当センターの遺伝解析・ホルモン解析、野外研究施設を利用した、野外研究等である。動物園・水族館に所属する研究員や飼育担当者による研究を、積極的に支援し、着実に成果を挙げているのは、ユニークな取り組みである。

資料 3. 共同利用研究の実施件数

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27
総数	36	59	68	97	95	94
うち動物園水族館での研究	(0)	(12)	(15)	(26)	(38)	(35)

・資源・設備等の提供及び利用状況

公募により、研究費の配分を伴う研究助成を 38 件実施した。また、研究費の配分を伴わない、施設などの利用による研究を 56 件実施した。2 つの野外観察施設は、年間の 72% (2 施設の平均) で利用され、のべ 2514 人の共同利用による利用があった。国内で最も多くのチンパンジーと国内で唯一のボノボを飼育する熊本サンクチュアリにおいては、研究活動が年間を通じて常に行われている他、のべ 340 人の共同利用による利用があった (平成 26 年度実績)。全般に非常によく利用されていると言える。

・研究会等の実施状況

毎年、関連する研究会を 4 件実施している。特に、「動物園大学」と銘打った研究会は、平成 23 年から毎年開催しており、動物園・水族館に関する研究発表が約 50 件行われ、共同利用研究の発表の場となると共に、関係者の交流の機会を提供している。

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

野外研究施設、チンパンジー飼育施設、遺伝学的実験施設などを活用して、数多くの共同利用・共同研究を受入れている。また、動物園、水族館での共同研究を推進し、大学などの研究機関に所属する研究者だけでなく、動物園、水族館に所属する職員による研究もサポートしている。

共同研究の実施件数、施設の利用状況などは十分な数があり、全体として、最先端の研究を進めると共に、研究の裾野を広げる役割も担っている。野生動物の基礎研究や保全研究、飼育動物の基礎研究において、研究機関に所属する研究者ならびに、動物園・水族館に所属する研究員や飼育担当者による研究を奨励・推進しており、関係者の期待に応えていると判断できる。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

いくつかの研究分野では、質の高い研究が行われている。特に、長期研究の行われているタンザニアの野生チンパンジー調査地、幸島や屋久島の野生ニホンザル調査地、熊本サンクチュアリなどの飼育下での動物の行動学、生理学的研究、実験的な手法を含む研究では、コンスタントにデータ収集ができることもあり、年間におよそ 40-50 報が主要な雑誌に掲載されている。また、マレーシア、インド、ブラジル、タンザニアなど新しい調査地や、ドールやオオカミなどのイヌ科動物や、野生のイルカ・クジラ類など、ほとんど研究例のない動物種を対象にした研究にも積極的に取り組んでいる。これらは、データを収集し発表するまでに時間がかかるものの、徐々に成果が出始めており、年に 5 報程度の論文が出るようになった。また、人間と動物の関係など、分野横断的な研究についても取り組み始めており、年に 3 報程度、論文、書籍、学会などで発表されている。

研究成果の特徴としては、対象種、学問領域、研究手法などがかなり幅広いと言えるだろう。また、野外調査に積極的に取り組んでいることも、生物学系の研究組織として、特徴的と言えるだろう。

未知の生き物を探求するという挑戦的な研究は、一般的な関心を引きやすく、メディアにも頻繁に取り上げられている(資料 4)。

また、動物園、水族館などの飼育下の動物研究を推進している点も特徴的である。研究者が中心となって推進する研究だけでなく、動物園、水族館の職員が中心となる研究も推進している。

資料 4. 新聞、雑誌、テレビ等で紹介された件数

H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
31	24	13	60	54	67

(水準)

期待される水準にある

(判断理由)

野生動物や飼育下の動物の保全や基礎研究については、部局の規模から十分な数と内容の発表成果がある。また、分野横断的な研究分野については、徐々に成果がでてきている。一般的な関心も高く、新聞、テレビなどのマスメディアで取り上げられる頻度も高い。動物園、水族館と研究連携協定も増えており(H27 年度末で 10 動物園、6 水族館、資料 5)動物園、水族館での共同利用研究の成果もあがってきている。また、寄附講座により、本センターのチンパンジー、ボノボの飼育施設である熊本サンクチュアリにおいて、動物の長

寿・福祉の研究も進めている。以上により、関係者の期待に応じていると判断できる。

資料 5. 連携協定を結んでいる連携動物園・水族館

種類	名称
動物園	京都市動物園 名古屋市東山動植物園 よこはま動物園ズーラシア 横浜市立金沢動物園 横浜市立野毛山動物園 熊本市動植物園 公益財団法人日本モンキーセンター 高知県立のいち動物公園 愛媛県立とべ動物園 わんぱーくこうちアニマルランド
水族館	名古屋港水族館 京都水族館 海きらら・九十九島水族館 神戸市立須磨海浜水族園 海遊館 NIFREL(ニフレル)*

*ニフレルは、動物園と水族館を融合した新しい形態の博物館であるが、主な展示内容から、ここでは水族館として集計している

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況
該当なし

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況
該当なし